

高良とみの家庭科学研究所とその教育についての 卒業生に対する聞き取り – 3

The Interview on The Tokyo Domestic Science Research
Institute (1933 – 1935) coordinated by KOURA Tomi and
Its Education to Its Graduates – 3

倉 元 綾 子

KURAMOTO Ayako

(Received October 1st, 1998)

This is the first interview on the Tokyo Domestic Science Research Institute(1933 – 1935) and its education to its graduates.

On June 2nd, 1997, Professor SUZUKI Toshiko and I have done the interview to the graduates from the Institute, which was coordinated by Dr. KOURA Tomi.

In part 3, I described the memories of Dr. KOURA Tomi and the conversations on home economics.

Key Words:

家政学史 history of home economics, 家政学教育 home economics education, インタビュー interview

解 説

本稿は、戦前から戦後にかけて平和運動や女性運動に関わった高良とみが校長であった家庭科学研究所とその卒業生たちに対して、1997年6月におこなった聞き取り調査の主要部分の記録である。家庭科学研究所は1933年（昭和8年）高良とみを校長として設置された。

パート3では、高良とみの思い出および家政学について記した。

1. 高良とみ先生の思い出

森安 : いつか、三越で展覧会があったとき、和田とみ子嬢帰国するという、こんな大きな絵があったですよ。それでね、毛皮をフワッとつけて、とてもきれいにしておられる実物大くらいの大きな絵がありました。どなたが描いたのかしら。

留美子 : すごいお嬢さんで帰ってきたことになっているけれど、手紙を分析すると、内実はそうではないのですよ。あれはやはり良くなかったと思いますね。母邦子に出した手紙に、「苦学しているとあまり言ってくれるな」と書いています。日本では、まだ労働を軽蔑するような風潮が

あるから、苦学生のイメージを嫌ったのですね。実際には休みの間だけ働いたようです。あとは、勉強、勉強でした。一番最後に、興生院の物置にあった鞆のなかから、アメリカ合州国時代のオーバーが出てきました。これは、樋口一葉のぼろ着物じゃないけれど、そういうものですよ。そういうものまで取ってありました。それは成瀬記念館に持ち込みました。これは、とにかく持っていきこうと。下着は捨てましたけれど。ツギハギだらけのシュミーズとかいろいろありましたよ。

鈴木：高良とみ関係文書目録をみると、手紙の一つひとつまで取ってあり、すごいです。そういうものをお捨てにはならなかったのですね。

真木：自伝にもありますが、母がアメリカ合州国でPh.Dをとって、アメリカ合州国の大学で教えるように働きかけがあったとき、祖母の邦子さんが「おまえを教育したのは日本のためであるからすぐ帰ってこい」と言っています。私のときにも同じでした。私はもう少し居ようかと思いましたが、母に「すぐ帰ってこい」と言われました。

留美子：アメリカ合州国の手伝いなんかさせるために留学させたんじゃないということです。

鈴木：一時代前の女性としては、そのお母さんである邦子さんもすごいものですね。

留美子：邦子は明治元年の生まれで、村で一番最初に洋服を作ってもらったとか、自転車を乗り回したとか。父親が群馬と横浜との間で絶えず蚕種の商売をしていましたから、非常に国際的です。キリスト教が早くから入ってきています。また、祖父の弥平が親戚中の反対を押し切って横浜の共立女学校に入れています。鹿鳴館時代に洋服を着たり、髷を結っていたりしたらしいです。渋沢栄一¹⁾の家が隣村で一緒に商売をしていたので、弥平はパリ万博に出品したり、宮中ご養蚕にも出仕しています。この渋沢栄一は日本女子大をつくるときにも相当協力しています。

田島弥平は一種の勤皇でしたけれど、国際的でしたね。日本は皆農民だったとは言いますが、蚕の関係の人はいわゆる稲作農民とはちょっとメンタリティが違います。行動的ですね。福沢諭吉²⁾が『時事新報』を作ったのが明治15年で、そこに、「田を作るよりも養蚕をしろ」という論説を書いています。それに刺激されて、何人もの人が来て、一冬二冬を過ごし、働きながら養蚕を

¹⁾1840-1951 (天保11-昭和26) 大正・昭和期の実業家。武蔵国島村生れ。実業界に指導的役割を果たし、革新的な近代企業を推進。道徳・経済の合一主義、国家・公共のための実業を唱える。大正期には実業界から引退、社会・公共事業に関与。1864一橋家に仕える。1867慶喜の弟昭武に随行しパリ万国博使節団に加わり、ヨーロッパ訪問、近代的社会経済の諸制度や産業施設見聞。1869大蔵省粗税司。1871大蔵権大丞。1873辞任。同年第一国立銀行設立。銀行集会所、手形交換所、東京商法会議所などを組織。

²⁾1834-1905 (天保5-明治34) 明治の思想家、教育者。豊前中津藩士の次男、大坂生れ。1854長崎で蘭学を学び、1855緒方洪庵塾に入る。1858江戸出府、蘭学塾を開く。1860渡米、1861-62欧州6ヵ国派遣使節、1867遣米使節。1864幕臣。1868御暇願提出。1868年4月慶応義塾(のちの慶応義塾大学)を開く。1873森有礼、西周、加藤弘之らと明六社を組織、1879東京学士会院初代会長。1882『時事新報』創刊。「内安外競」「脱亜入欧」「官民調和」を掲げる。権力政治観に移行。保険事業に貢献。1866-69『西洋事情』。1872-76『学問のすゝめ』17編。1875『文明論之概略』。1897『福翁自伝』、『福翁百話』。(松沢弘陽：松田喜義、世界大百科事典、(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha、東京 [1998] による)

学んで、それを本にした人もいたようです。そのうちの一人が2年ぐらいいたあげく、「この荷物を預けておくから、蚕の種を貸してください」と言われて、「よろしい」と百枚を貸したら、それきり帰ってこなかった。そこで、その荷物を開けてみたら、新聞紙が入っていたと言います。「だまされたのかな」と言う人もあったけれど、弥平はなにも言わなかった。翌年、山梨の方から蚕種の引きあいに来て、「去年ある人から買ったらなかなか良かったから、今年もくれ」ということがあったそうです。それを祖母（邦子）が書いています。だから、明治は蚕ぐらいしかなかったと思います。

真木 : 何年か前に横浜の開港記念館で田島家文書ともう一つ群馬の関係の展覧会がありました。私も見に行きました。『養蚕新論』とか、印刷場所は分かりませんが、翻訳の本とかがありました。学者などがやってきて、田島家で洋学などが開国に向けて入ってきたところだったようです。

留美子 : 結構、米沢まで行って、勉強したりしています。その人が明治12年にイタリアに蚕種のことで行きました。『養蚕新論』上下、三冊くらいのを田島弥平が書いています。それは木版で、田島家の二階にいっぱい積んであります。そして、題字を西郷隆盛³⁾が書いたり、頼山陽⁴⁾の額が玄関にかかっていたりします。あの辺は反幕。なぜ反幕かというと、幕府は規制ばかりしていましたから。桑を植えてはいけないとか。だから、必然的に勤皇になった。昔の勤皇は、観念的でなくて経済から来ているところがあります。あそこら辺は幕府の直轄地、利根川流域です。岩鼻陣屋⁵⁾というのがありましたが、ある時期にそれが崩壊したらしいのです。それで、すごい勢いで一揆が起こりました。

森安 : 高良先生は旦那さんが良い方でいらっしゃいました。だから、そこまで羽ばたくことができたのではないかしら。

留美子 : それは最初からの約束だったみたいです。母はそういう人を探したのです。父の手紙に

³⁾1827-1877 (文政10-明治10) 幕末・明治維新期の政治家。鹿児島生れ。大久保利通、木戸孝允とともに明治維新の三傑。号は南洲。藩主島津斉彬に見いだされ活躍。1867倒幕、王政復古クーデタに成功。1868勝海舟との会談で江戸無血開城。1871明治政府参議。地租改正、徴兵制、学制、身分制解消、秩禄処分方針、司法制度整備、鉄道敷設など開明的政策を推進。1873朝鮮国交問題で下野(明治6年の政変)、鹿児島に引退。77西南戦争で擁立され、9月24日城山で自刃。(毛利敏彦：世界大百科事典，(c)1998 Hitachi Digital Heibonsha，東京 [1998] による。)

⁴⁾1780-1832 (安永9-天保3) 江戸後期の儒学者、詩人。大坂生れ。幕末・維新期の思想界に大きな影響を及ぼす。1822京都三本木「山紫水明処」を営み、門弟教育、文人・学者と交流。1826『日本外史』。ほかに『通議』、『日本政記』など。

⁵⁾上野国(群馬県)群馬郡の代官陣屋。1590以後前橋藩領、村高264石余。1749幕府領。1793岩鼻砦跡に関東代官陣屋設置。規模4.6ha、支配区域上州3郡・武州6郡、最高時50万石。北関東の守り、中山道と利根川の交通の要所を固め、無宿の取締りや百姓一揆の鎮圧に大きな役割を果たす。1805関東取締出役の中心的場所。1868年1月崩壊。(井上定幸：世界大百科事典，(c)1998 Hitachi Digital Heibonsha，東京 [1998] による。)

も、自分がもし天才だったら奥さんを自分のために働かせる、尽くしてもらうかも知れないが、自分が天才でないことは良く分かっているの、あなたは世界に向かって羽ばたいてくださいというふうなことを書いたものがあります。

森安 : それだけ理解のある方はなかなかありませんよね。普通もっと男の人がわがままなことを言っていました。

留美子 : 父は、私たちの教育でもそうでしたが、森田療法⁶⁾ という、人をのびのびとさせる、剪定をしない、というやり方でした。

森安 : あの辺はとても理解がありました。普通なら、とてもそこまでいきません。もっと押さえつけられてしまいますから。

留美子 : まあ、中身まで理解したかは分かりません。ごく晩年、母に、「大政翼賛会のことをお父さんに相談したの？」と聞いたら、「いや、何も言わないんだよ。何も相談しないんだよ」と言っていました。父は、どちらかという、軍人嫌いの人でしたが、旧制高校まで行った人たちは自由主義教育を受けていますからね。

母の出た県立神戸第一高女というのは、質実剛健、国家主義の教育だったようです。「孝のきわみに忠がある」などと言うように。服装は筒袖の着物に海老茶袴です。ものすごく厳格で、その寮に4年いました。「もし、私の長い人生の中で国家主義的なものがあるとすれば、それは神戸県一で習ったものであります」と書いています。本当かなあ、と思っていましたが、当時書いたものが出てきました。国家のことは出てきませんが、実に真面目なものです。

真木 : 父は三つ違いで鹿児島島の七高から九州大学でした。気分が全然違います。母なんかは明治時代の海外雄飛、上昇志向がありました。父はどちらかという、大正デモクラシー的でした。父は竹久夢二⁷⁾ が好きでした。母は、「あんな肺病病みみたいなの」なんて言っていました。

留美子 : 三才違いだったけれど、大きく違うところがありました。父は尾崎弴堂(行雄)⁸⁾ の講

⁶⁾1920年ころ森田正馬(まさたけ)が創始した、神経症者に対する独自の精神療法。基本姿勢(1)人間に備わる自然治癒力(常態心理)の発動化を促すこと、(2)神経症形成の根底にある感情執着の悪循環を断ち切ること。行動中心の技法。基本的な態度「症状(気分)は、“あるがまま”に受け入れ、やるべきことを目的本位、行動本位に実行させる」、「健康人らしくすれば、健康になれる」というアプローチ。指示的な精神療法。(大原健士郎:世界大百科事典,(c)1998 Hitachi Digital Heibonsha 東京[1998]による。)

⁷⁾1884-1934(明治14-昭和9)明治・大正期の画家、詩人。岡山県生れ。藤島武二や青木繁の浪漫主義を受けつぎ、世紀末的耽美(たんび)主義、懐古趣味、異国趣味を盛った表現。つぶらな瞳の愁いを帯びた「夢二式美人」は大正期の大衆の心をとらえ、1913の『宵待草』の歌が大流行。1914東京の「港屋」で、自ら千代紙や半襟などの小間物の図案、楽譜をデザイン。生活美術、商業美術の先駆者。(藤井久栄:世界大百科事典,(c)1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京[1998]による。)

⁸⁾1859-1954(安政6-昭和29)明治・大正・昭和期の代表的自由主義政治家。弴堂は号。神奈川県生れ。1882立憲改進黨創立。1890第1回総選挙に三重県から当選、以後25回連続当選、代議士生活63年。1898大隈重信内閣文相。1900立憲政友会創立。1903-1912東京市長。1913第1次護憲運動の先頭に立つ。「憲政の神様」。1914大隈内閣法相。1916憲政会に加わる。第1次世界大戦後、普通選挙運動。1922革新抑楽部に加わる。軍備縮小同志会。1925治安維持法制定に最後まで反対。軍国主義化に反対。1960尾崎記念館建設。1955-1956『尾崎弴堂全集』全12巻。(松尾尊鶴:世界大百科事典,(c)1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京[1998]などによる。)

演を聴いたことがあるとっていました。憲政運動の頃に育っています。自分ではある程度左翼的だと思っていたようです。

留美子 : 女性は旧制高校にいけないから、割合にファシズムには弱かったのではないでしょう。一般女性の方が翼賛的、体制協力的になっていきます。だから、指導者だったからというわけだけでもありません。その辺のところは、もっと掘り起こさないといけません。

林 : 先生は大政翼賛会に参加し、指導をしておられました。とはいえ、いわゆる大政翼賛会の方針にこだわらずに、先生なりの感覚、思想で入っていらっしゃいました。

留美子 : 地方に民情視察に行つて、すごく貧乏な様子を見て、たいへん同情していました。残された未発表原稿のなかにも新潟のある村に行つて、昔は豊かだったのに、こんなに貧乏になっている、娘の身売りさえしなければならなくなっていると書いたものもあります。これはほとんど革命待望のような、激しい文章です。ですから、近衛文麿の新体制運動による上からの改革に期待したのです。幻想だったかもしれませんが、貧乏な地方の状態を改善しようとして上部に意見を言おうとしたようです。大政翼賛会などにもそういう改善の機関として、多少期待するところがありました。下部からの意見をあげて、改革したかったのです。しかし、1回やったら、もう駄目だと分かつたみたいです。軍部が権力をとってしまったのです。

鈴木 : そうすると、早く手を引かれたのですね。

留美子 : ええ。翼賛会の議員は意外に辞めていません。誰かが非難していましたが、しかし、もう出席は2回目ぐらいで止めています。

鈴木 : しかし、それができないとわかつて、手を引いていくあたりも、高良とみの真面目というところですね。おみごとです。

留美子 : 中国の飢饉を救済せよとかの文章も残っています。飢えや貧乏に対する同情のある人でした。ただ時代が違ってきているので、平塚らいてうさんたちのように議会を通じての改善をかんがえることは、もはやありませんでした。

森安 : 何しろ、戦争がありましたからね。あの時、皆もう何も言えなかつたですか。

鈴木 : 高良先生とも長くお付き合いをなさつてきて、その後はどう考えられますか。

高良先生は自伝の中でご自分が戦中にどういう役割を果たしてしまつたか、みごとに反省を込めて書いておられます。戦争に協力することになつてしまつたとか、そういう風にご自分で総括なさっています。そういう方は少ないと思います。戦中に大政翼賛会に入つたりした時期もあります。その辺りはどういう風にご覧になつておられますか。

江里口 : 一緒に歩いていると、落ちていた釘などをサツと拾われたりしてましたね。

留美子 : 母はアメリカ合州国での教育の影響もあつたのでしょうか、まず、「ごみを捨ててはいけない」と言っていました。どんな小さな物でも捨てないで持つて帰りましたね。その後は、節約もあつたとも思いますけれど。たとえば、紙ナプキンなどをハンドバッグの中に入れていて、私たちが「ちり紙がない」などという、何でも出てきました。爪楊枝も、ナプキンも、など。そういう意味ではけっこう勤儉節約でした。しかし、それは曾祖父の時代からあつたようです。

アメリカ合州国での貧乏な生活から出てきた発想かもしれないし、どこから出てきたのでしょうか。

真木 : 今、リサイクルと言いますが、ずっと昔からやっていました。家は、母のものがいっぱいゴチャゴチャしてました。いつか母が外国旅行したときに、「この際だ」と思って少し片づけました。そうすると、引き出しに一杯牛乳瓶のふたがありました。そういうのを全部焼きました。なんで、こういうものを貯めていたのだらうと思いました。帰国してから、「あれ、どうした?」、と言うのです。「あんなもの、何に使うの?」と聞いたたら、「あれをどういう風に使おうかと思って、いつも寝てから考えていた」と言いました。

そのうち、網戸が壊れたとき、網戸をはって、そこに釘を打つのに、牛乳瓶のふたを台紙に使ってました。花壇の縁に夏みかんが並べてあったりもしました。すぐに腐ってしまうのですが、「モノは最後まで命を全うしなくてはいけない」と少し固定観念のようなものを持ってました。

留美子 : それは父のやっていた森田療法にも関連があるだろうと思います。森田正馬先生の考え方で、モノの命を最後まで使うという考え方でですね。父もそういうタイプだったし、戦前は皆そうでした。お祖父さんである田島弥平⁹⁾などは、竈(へっつい)のご飯粒をいつも最後まで残さずさらったという人です。だから、皆そうでした。儒教の教えも、ガンジーも、いろいろな影響を受けています。そうかと思うといろいろな無駄使いもしていたような気がします。

森安 : 高良先生は西田天香さん¹⁰⁾と参議院の緑風会でご一緒でした。天香さんは京都で一燈園というグループを作り、共同生活をされていたようです。修行の一つとして一部の会員がスワラジ劇団をつくって全国を巡行していました。東京講演のときは、連絡先が志乃田寿司本舗と記憶しています。高良先生からの指示で皆さんの切符をまとめて買いました。

高良先生はインドのマハートマー・ガンジーを訪ね、日本の戦争を大事にならないうちに止めさせたいので協力してくださいとお願いしたそうです。その折、ガンジーさんが牢に入れられたとき持っていったチャルカ(携帯用の紡ぎ車)を世界平和を祈っていると手渡して下さり、それを一燈園に預けてありました。「森安さんが織物をしているなら使ってみませんか」と言われ、一燈園に連絡して下さり、天香さんの孫という青年が届けて下さいました。私はとても感激して在日インド人にチャルカの使い方を習い、羊毛を数色に染め、カード(ふわふわにする)してそのチャルカで紡ぎ、糸を作りました。その糸で手織りしてマフラーを二本つくり、高

⁹⁾1822-1898(文政5-明治31) 幕末・明治期の養蚕家。上野国島村生れ。養蚕技術の改良に貢献。清涼法を開発。1872渋沢栄一の協力により田島武平と島村勸業会社設立。1879年12月蚕種5万枚を携行しイタリヤに渡り販売(-1880年7月)。1872『養蚕新論』。(湯本豪一:海を越えた日本人名辞典, pp.362-363, 日外アソシエーツ, 東京[1985]による。)

¹⁰⁾1872-1968(明治5-昭和43) 明治・大正・昭和期の宗教家。滋賀県長浜の紙問屋の子。一燈園の創始者

良先生と一燈園にさしあげました。

そのチャルカと一緒に当時のインドの新聞があり、マハートマー・ガンジーの誕生日にスピンセレモニーを行なったという記事です。広い部屋の中に畳1帖敷位の一段高いところにガンジーさんが座り、そのまわりに白い服の婦人たちが10人位。そして唯一の男性は白い詰め襟服で端正な姿の方がネルーさん¹¹⁾です。皆、各々のチャルカをまわしている写真です。その後、チャルカと新聞は一燈園にお返ししましたが、新聞の写真はコピーしとけば良かったと思いました。チャルカは写真を撮ってあります。

このチャルカを使って、京都のお茶室でガンジーさんのお誕生日にスピン・セレモニーをしました。これでスピンをしました。皆で、女の人もいてやりました。

倉元 : 改めて、高良先生とインドとの深い関わりを感じますね。

森安 : 高良先生がタゴールさんの詩を読んでもくださったりしました。たとえば、赤ちゃんの目の色のような本当に深い海のブルーについてのきれいな詩を読んでもくださいました。皆で、スワラジ劇団を見に行ったときはいつも写真を写していましたのでたくさん写真があります。

真鶴の日本料理屋での記念写真です。ここでごちそうをしてくださりました。家庭科学研究所で私たちに心理学を教えてくださった稲葉信龍先生もおいでになりました。稲葉先生は最後は中央大学の教授をなさいました。稲葉先生は写真がお好きだし、高良先生と親しくしておられました。

真木 : 1936年(昭和11)ガンジーのところに行きました。そこで、「賀川豊彦¹²⁾とか、あなたなどが死ななければこの戦争は止められない」と言われたそうです。そこでフッと頭に浮かんだのは、阿Qが処刑されている場で、「いや、恐ろしい。あんなことになったらどうしよう、大変だ」と思ったそうです。「結局、死ななかったから戦争を止められなかった」と言いました。イメージが即物的なところがありましたね。

留美子 : 結構、怖がりだったですね。

¹¹⁾Pandit Jawaharlal Nehru 1889-1964 インドの政治家、独立インド初代首相(1947-64)。1919サティヤーグラハ(非暴力抵抗)闘争以後マハートマー・ガンディーと共に歩む。反英・反帝国主義闘争の先頭に立つ。21-45までに9回、通算9年の獄中生活を体験。1928国民会議派書記長。1929年同議長、全インド労働組合会議議長。36(2度)、46にも会議派議長。54平和五原則。1955アジア・アフリカ会議(バンドン)で主導的な立場に立つ。すぐれた歴史認識で知られる。1936『自伝』。1939『父が子に語る世界史』。1946『インドの発見』。(内藤雅雄:世界大百科事典、(c)1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京[1998]による。)

¹²⁾1888-1960(明治21-昭和35) 大正・昭和期のキリスト教社会運動家。近代の代表的キリスト者のひとり。神戸生れ。贖罪(しよくざい)愛の実践とキリスト教信仰の政治、社会、経済への具体的な応用の試みに特徴。神学生時代に神戸市葺合の貧民窟に住みこみ伝道開始。1921川崎・三菱神戸造船所争議指導。関東大震災のあと東京本所にセツルメント。労働運動、農民運動、消費組合・協同組合運動などを創始。著作・伝道・講演で世界的にも知られた。第2次大戦中、憲兵隊や警察に留置さる。日本社会党結成に参加。世界連邦運動に参加。1920ベストセラー『死線を越えて』。1962-64『賀川豊彦全集』全24巻。(古屋安雄:世界大百科事典、(c)1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京[1998]による。)

林 : 高良先生は絵もすばらしいし、お声もすばらしかった。

留美子 : 女学校時代には声楽家、音楽家になりたい、絵描きにも、学校の先生にもなりたい、どうしたらいいのかしらと思っていたようです。

森安 : 謡曲もやっていたのではないですか。

留美子 : 晩年にはね。

倉元 : 多芸な方ですね。

森安 : お声が立つんですよ。

真木 : 母にも詩人的なところがありました。だから、たいへんロマンチストみたいなところがありました。最後に、真鶴に行って、ほとんど寝てすごすことが多くなったころ、見た夢について話してくれました。「タゴールさんのお屋敷に行ったのよ、青い紫色の花がいっぱい咲いていたのよ。」何という花かと聞きますと、「クイーン・エリザベス」と言うのです。

沢田美喜さん¹³⁾のエリザベス・サンダース・ホームの子どもたちが真鶴にみかん狩りなどに来ていましたが、「沢田美喜さんの所から、知らせが来て、食べるものがないって言ったのよ、あんパンを手配したのよ」とも言っていました。とにかく、食べることには大変執着がありました。飢餓の研究も、第1次大戦後、飢餓を見たのがきっかけでやりました。とにかく、飢餓にたいしては本当に執着がありましたね。夢の中で、裁判所で離婚調停をして遅くなったから、あんパンを買って食べたとか。

それから、中落合にいたときのこと、夜中に急に着物を着替えだしたので、付き添いの人が、「どうなさったのですか」と聞くと、「今ねえ、葉山の御用邸の天皇陛下から電話があった」と話すので、「今、夜中ですよ」と言ったそうです。その次には、また着替えはじめて、「今、パンパンが追っかけられて大変だから、捕まえに行かなければならない」と言ったといいます。えらく、上と下です、真ん中が抜け落ちているって笑いました。祖母邦子が、ずっと矯風会をやっていましたから、その影響もあったと思います。

八月のお盆のころ、ついていた山崎さんがちょっと買い物に出かけて帰ってきて、「今日は道が空いていましたよ」と言ったら、「その道はパキスタンまで続いているの?」と尋ねたといいます。そういうところがありましたね。寝室の隣に、トイレとお風呂がありましたが、そのドアがパタンと閉まった音がしたら、「あら、キャビンの扉がしまったみたい」と華やかな夢を見ていました。夢は枯野を駆けめぐる、ではありませんが、そういうこともありました。

森安 : インターナショナルですね。

留美子 : からゆきさんを助けた話もありましたね。

¹³⁾1901-1980 (明治34-昭和55) 昭和期の社会事業家。東京生れ。1948混血孤児のためにエリザベス・サンダース・ホームを開設。2000人を超す孤児を育て、海外との養子縁組を推進。(八代崇:世界大百科事典, (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京 [1998] による。)

真木 : 亡くなる前の年の12月8日, 入院していた母のところに行って, 「お母さん, 今日は何の日か知ってる?」って聞いたら, 「戦争の始まった日」と言うのです。「それから?」と聞いても返事なし。「私の誕生日よ」と言ったのですが, 初めての子どもの出産日なんか頭がない。やっぱり「天下国家」なんです。また, その頃, 自衛隊の海外派遣の法案が国会に上程されていたので, 私が意見を聞くと, 「自衛隊は日本のものです。海外に出すことは私は賛成しません」と言いました。もう, あまり話をしなくなって, 記憶力も衰えていたことでしたけれど, さすが…と思いました。

留美子 : 私に子どもが生まれて, いろいろなものを編んでくれました。しかし, 途中でパタンと切れたものがあったりしました。毛糸がなくなっただけなのですが。襟巻きでもなんでも, 途中でパタンと切れたのをくれたりしました。そうでないと, 色違いのありあわせのものを全部継いだものとか。

立入 : ヘーッ。

真木 : 真鶴に住んでいたころ, 上着にいっぱい, いろんな色のいろんなサイズのボタンが付いているんです。「どうしたの?」と聞くと, 「虫が食ったところにありあわせのボタンをつけた」と答えました。

森安, 立入 : 創造的ね。すごいオリジナリティね (ハハハ)。

真木 : そうなんです。そういう感覚というのは最近の方が流行るかもしれませんね。

留美子 : 洋服はだれか佐俣さんがどこかへ持っていったと聞きましたが。

真木 : 若いときに着たのは佐俣愛子さんという文化服装学院の方で, 教会の関係の方が持っていたかれました。学院にコレクションがあります。それでは, 見に来てくださいということで来てもらいました。結構, ウエストの切替えが低いものや, いろいろ良いものもありました。若いときはそういう服も着ていたようですけども。

留美子 : そういうものは大正時代の洋服のサンプルとして持っていったのでしょうか。私が知っているのは, 帽子にこういう垂れ幕 (ヴェール) がついたものです。

真木 : 出かけるときの服装も正装しようと思いました。見てみると, とにかくありとあらゆるものをくっつけていました。胸にブローチがあって, ネックレスがあって, それに帽子, そこに果物のかごにくっついていたりボンがついていたりしました。「お母さん, それ取りなさいよ, 過剰だよ」と言って, むしりとったりしました。悲しそうな顔をしていましたね。

留美子 : アメリカ合州国ふうなのかなあ。

林 : アメリカ合州国の生活が身についていらっしゃるから。

真木 : 真鶴で暮らしていた80才くらいになってからのある時, 私に「天ぶらとフライとどう違うの?」と聞いたことがあります。「80才すぎになるまでよくそんなことも知らないで生きてきたわねえ…」と変に感心しました。母が (日本) 女子大に在学している時には, 英文科の学生は

7人くらいしかいなかったそうです。ある日その7人皆で、「家政科の人たちは、やれフランス料理だ、何だって言っていてやっているが、私たちはどうしたらいいのかしら」という話しになったそうです。すると、母は「ああ、コックを雇えばいいのよ」と言ったそうです。「結局雇えなかったじゃないの。いい気味だ」と言ってやりました。

留美子 : 私も、天ぷらとフライとどう違うのか、結婚するまで知らなかったのよ。(ハハハ)

真木 : それでもまあ、結婚するぐらいにはだいたい覚えるのだけど、80才過ぎて初めてなんだもの…。(ハハハ)

立入 : 幸せな方なんじゃないですか。

真木 : そうですねえ、どういうんですかね。

留美子 : 女学校でも女子大でもアメリカでも、ずっと寮生活でしたからね。

2. 家政学について

鈴木 : 家政学については、日本の場合、やはり戦前からの家事・裁縫のイメージがなかなか払拭されないままです。良妻賢母の女子教育というイメージです。また、家政学と関連して家庭科教育という教科があります。家庭科は最近変わったとは言われますが、小・中・高で行なわれていることの実際は、いかに上手にお料理を作るか、いかに裁縫を上手にするかという風です。それが、戦前のイメージと重なっており、相変わらず、家事・裁縫・良妻賢母というイメージから抜けきれないのが悩みです。

森安 : 男性を変えなくてはいけないのではないですか。

鈴木 : そうですね。

江里口 : 家庭科はお料理、お裁縫を教えているけれど、現実の生活をみると、裁縫などはほとんどしないし何も作りません。そういう中での家庭科は難しいですね。

鈴木 : そうなんです。

江里口 : お料理も結局そうになってしまうのではありませんか。私はそう思います。

鈴木 : 自伝の一節には、「経済科では、社会経済機構に呼応して、家庭が覚醒しなくてはならないという主旨から、経済の研究を行ない、併せて職業指導もしました」とあります。現在の私たちも、これと同様の主旨で教育・研究を進めていきつつありますが、なかなかそれが深まるにはいたっていません。一方、食物、被服の分野では関連する医学、生化学、農芸化学、繊維化学、工学、そういう所と同じような、自然科学方面のたいへん細かいところをつついています。家政や生活との接点がなかなか見つかりにくくなっています。

留美子 : 高校側の問題とかはないのですか。

鈴木 : 公害とか、情報とか、私たちが生きるうえで全体の枠組みのなかで考えなくてはならないと思います。

倉元 : 多少問題を感じている人もいます。しかし、「では、どうするか?」となると、まだ解

決策は見つかっていません。現在なお模索しているところです。家庭科学研究所の持っていた広い視野が、戦後には受け継がれることが少なく、狭い視野でものを見てきたところがあります。そこをどうしたら広くできるのか、まだ解決策が見つかってはいません。難しい課題ですね。

森安 : 人間学みたいなものが一番大事ではないですか。「家庭として」というよりも、「人間として」、男も女も。

女の人が自立することが大切ですね。女の人が子どもがいて、離婚して、などというのと、大変でしたからね。最高学府を出ている女の人で、男の人と同じだけの給与があった方がありました。弁護士と結婚しましたが、駄目でした。キャリア・ウーマンなのですけれど、男の人の方が駄目、そういうのを男の人が嫌がる、もっとそういう人でない方が良いみたいですね。だから、男を変えなくては駄目です。

真木 : 夫婦別姓などでも、家庭が壊れる、って言っています。姓が唯一の接着剤ですか。

留美子 : そんなことで壊れるなら、とくに壊れていますよ。

鈴木 : 現在では、学生にもそういう考え方のものもいます。とにかく、姓が一緒だと家族という気がする、一緒だから夫婦という気がする、という女子学生も多くいます。

森安 : それは、やはりお母さんが悪いですね。もう少し小さいときから自立させるべきです。もっと協力的になるように。男の子をお母さんがあんまりかわいがるから、大人になっても男としてちゃんとしていないのだと思います。だから、離婚してしまいます。

立入 : 今の若い人の方がよほど保守的ですね。仕事をもった女の方(かた)は偉いです。娘が女子学院ですが、同窓会のお知らせの消息は、今、離婚、再婚が多いと言いますよ。皆、翻訳家、医者などの職業を持っています。皆、仕事もちながら、5人も6人も子どもを育てています。偉いものです。